



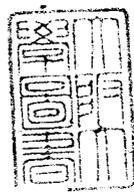
Title	古典と古語
Author(s)	澤瀉, 久孝
Citation	懐徳. 1943, 21, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/89100">https://hdl.handle.net/11094/89100</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 懷 德 第二十一號



## 古典と古語

澤 瀉 久 孝



古典を明かにするといふことは、結局 いじへてゐる 古意を明かにすることであることは、申すまでもないこと  
であります。古意を明かにするために古典を明かにする、而もその古典を明かにするには、古語を明  
かにすべきことは申すまでもないことあります。而もその古語が今まで色々の學者達によりまして、  
次第に明かになつて居るわけでありますが、尙色々分らないことが多く、吾々の努力によりまして、  
多少とも今までの疑問を明かにするやうな點がないでもないやうに思ひますので、本日はさういふや  
うな點に就きまして、私が考へつきました一二の古語に就きまして、お話を申し上げたいと思ふのであ  
ります。

上代と申しますと、たゞ素朴であつて、まだ世の中があまり開けず、言葉だとか、文字だとかいふ

やうなことも、幼稚無造作に使はれて居つたのでないかと考へるやうな、傾きがないでもないかと思ひますが、決してさうではないやうに思ふのであります。しかし、例へば萬葉集で「思ふ」といふ言葉を今日書きますやうに「思」といふ字を書くことは、一般に御存知の通りであると思ひますが、その他に萬葉集では「念」といふ字が度々使はれて居ります。これなどもただ不用意に見ますと「思」と書いたり、「念」と書いたりするやうでありますが、この「念」といふ字が澤山使はれて居るのであります。萬葉集全部に就て申しますと、「念」といふ字が五百五十字使はれて居りまして、「思」の方は百九十三ばかりあるやうであります。或は漏れて居るかと思ひますが、とにかくこの概數だけと比較してみましても、非常に差があるのであります。殊に「思ほゆ」——思はれる——といふ時に「所念」だとか「所思」だとか書かれてゐますが、「所念」の方は九十三例で「所思」の方は十三例だけしかないのであります。これを更に人麿の作及び人麿集の作と記されたものに就いて申しますと、「念」といふ字は七十四用ひて居りまして、「思」といふ字は僅かに十三しか用ひてゐないのであります。これはどういふことであるか、當時「思」といふ字は「念」といふ字を書くのが普通であつたのかと申しますと、どうもさうではないやうであります。何故さうでないかと申しますと、歌の題に用ひられて居る場合には、決して「念」といふ字が使はれてゐないのであります。例へば、「思ひを述べる」といふ場合には必ず「陳思」と書いてあります。或は「思ひを發す」といふ場合も、「思」の字が書いてありまして、

決して「念」と書いてないのであります。「思ひ出」といふ場合には「思出」と書いてありまして、決して「念出」と書いてないのであります。それで當時の使ひ方が分るのであります。

それならば何故「念」といふ字を書いたかと申しますと、「念」といふ字が當時の人の氣持にふさはしい文字だと感じて使つたと思ふのであります。と申しますのは、支那の辭書を見ますと、「念」といふ字に、「常思也」といふ註がついて居ります。或は「念黏也、意相親愛、心黏著不能忘也」といふやうな註がついて居ります。「念は黏著して……」従つてさういふ漢字のもつて居る意味が、當時の歌人の氣持にふさはしい感じを與へましたので、それでわざと「念」といふ字を使つたのである、といふやうに、思はれるのであります。さうして一方「思」といふ字を、又萬葉人は「偲ぶ」と讀まして居るのであります。その「しのぶ」といふ字は、今日人偏を加へて書くのであります。萬葉集には、人偏を使つた所もありますが、寧ろ「思」といふ字を書いて、「偲ぶ」と讀まして居る例が多いのであります。それで「思」といふ字が書いてある場合に、これを、「思ふ」と讀むか、「偲ぶ」と讀むか疑問の場合が相當にあるのであります。が今申しましたやうな事實を考へて、さうして萬葉集の歌を見ますと、自然に、何と讀むかといふことが解決のつく歌があるのであります、それは例へば笠郎女の歌に

吾が形見見つつ偲はせあらたまの年の緒長く吾も思はむ

とありまして、さうして、この歌の結句は原文に「將思」と書かれて居るのであります。これは笠郎女が家持に贈つたものでありまして、「年の緒長く吾もしのばむ」と讀むか、「おもはむ」と讀むか、どちらがいゝか。これは從來は「しのばむ」と讀まれて居るのでありまして、私の作りました新校萬葉集にも、「しのばむ」と假名をつけて置いたのであります。「吾が形見見つつ偲ばせ」さうして「年の緒長く吾もしのばむ」と上も、下も「しのぶ」と讀んだ方が、調子がいいやうに思はれるのであります。けれどもこれを今申しましたことに當嵌めて申しますと、「偲ぶ」といふことは、今日でも使ひますやうに、「或る縁に觸れて、ものを思ふ」のでありまして、花を見、月を見、或は鳥の鳴くを聴き、雲を望み、雪を眺めといふ風に、縁に觸れてものを思ふ心が、それが「偲ぶ」であります。それで「吾が形見見つつ偲ぶ」といふことは、まさに自分のお贈りした形見を見つゝ、それを縁として自分を偲んでいただきたいといふのでありますから、これはまさに偲ぶといふ語意に、まことになつた用ひ方であることが分るのであります。それに對して、「あらたまの年の緒を長く」といふのは右に字書を引きました「常思」といふ言葉に當るのでありますから、これには「思」の字は書いてありますけれども、これは結局「念」といふ心持で書かれて居るのであります。即ちこれは「思はむ」と讀むべきである事がわかるのであります。それで新校萬葉集に「偲ばせ」と讀んだのはあやまりで、「おもはむ」と改むべきものと思ふのであります。

さういふ風に、たゞ一つの文字使ひでありますが、それを上代の人は斯く慎重に用ひて居るやうに思ふのであります。それで吾々は萬葉の歌を読む場合に、やはりさういふやうな心持を以て読み味はふことによつて、萬葉人の歌を正しく読み、正しく解き、そしてはじめて萬葉人の心に正しく觸れることが出来ると思ふのであります。

そこで一つの言葉を取上げて申上げて見たいと思ふのでありますが、萬葉集には、「もみぢ」を詠んだ歌が随分澤山あります。その「もみぢ」を現はすのに、「黄葉」と書いた文字が澤山用ひられて居るのであります。さうして今日のやうに「紅葉」と書いた例は、たつた一つしかないのであります。私の調べました所によりますと、黄葉と書きまして、「もみぢ」といふ意味に使つて居る所は、全部で七十六の例があるのであります。その中には歌の題に用ひられて居るのが五つ、もみぢ、又はもみぢ葉といふ風に名詞として歌の中で用ひられて居るのが六十五であります。「黄葉」といふ文字で、「もみぢ」と読む場合と、「もみぢ葉」と読む場合と二つあるのであります。それを合せて六十五あります。それから歌の註の中に一箇所あるのであります。それは名詞として用ひられたのであります。動詞として用ひられたのが五つあるやうであります。尙その他に一つ、たゞ「葉」といふ字が書いてあるのがありますが、これは今までの學者の説が一致して居りますやうに、大體「黄」といふ文字が落ちたのであらうといふことになつて居ります。その他に「黄變」と書いて、「もみぢ」とか「もみぢ

して」とか動詞に使つた所が六つありますし、もう一つ「黄」やはり黄色に變ずるといふのと同じこととで、この字を書いたのが一箇所、「黄色」と書いて、「もみぢ」と使つた所が二箇所、單に「黄」一字を使つて、「もみぢ」と讀ましたのが三箇所あるのであります。一方「紅」の方は、「紅葉」といふのがたつた一箇所あるのであります。

妹許がと馬に鞍置きて生駒山うち越え來れば紅葉ちりつつ

といふ歌にあるだけであります。その他に「赤葉」と書いた所が、卷十三に一箇所あります。その他に單に「赤」といふ字を書きまして、「もみぢぬ」とか「もみぢねば」とか動詞に用ひた所が二箇所あるのであります。かういふ風に「紅」又は「赤」の文字を用ゐたものは、集中にたつた四箇所しかないのであります。それに對して「黄」の方は、全部合せると、八十八を數へるのであります。その他に「黄」の字が落ちたと思はれる所が右に擧げましたやうに一箇所あるのであります。

かういふ風に今日の人が考へると不思議に思はれるやうな文字の使用法は、これは何故であるかといふ問題でありますが、これに就て、私は今まであまり考へたことはなかつたのであります。これは一つは黄色といふ言葉が、今日考へられる原色の黄といふよりも、もう少し色が違つたものとして使はれて居つたのでないかと、以前に考へたことがあります。それは「埴土はに」といふ言葉を表すのに、「赤土」と書いたのと、「黄土」と書いたのと二つあるのであります。赤土と書いたのが三箇所、黄

土と書いたのが四箇所あるのであります。さうして歌の題辭としては、赤土の方が用ひられて居るのであります。かういふ所を見ますと、赤土と黄土は、可なり接近して扱はれて居つたのでないか、つまり橙色といふものが、黄として扱はれて居つたのでないか、かういふことを私は前には感じて居つたのであります。それは今日もその考へは變らないのであります。併したゞそれだけでなしに、「もみぢ」といふ言葉の内容が、今日と少し違つて居るのでないかといふことに氣ついたのであります。と申しますのは、萬葉集の卷の十に「もみぢを詠ず」といふ題の下に、澤山の歌が集められて居るのであります。そのもみぢはやはり「黄葉」と書いてありまして、秋の雑歌の中に四十一首集められて居るのであります。それから秋の相聞の中に、「黄葉に寄す」と題して作られて居るのが三首、冬の部に「黄葉を詠ず」と書いてあるのが一首あります。その他卷の八にまだ澤山黄葉の歌が集められて居るのであります。今日もみぢと申しますと楓の美名のやうになつてゐますが、面白いことには、萬葉集にはその楓のもみぢを詠んだのが、たつた二首しかないのであります。それは卷の八に出て居ります。

吾が屋戸に黄變づかへるで見るとに妹を懸けつゝ戀ひぬ日はなし

といふ歌で、「もみぢ」は動詞として使はれて居るのであります。紅葉した楓といふ風に使はれて居るのであります。とにかく「もみぢかへるで」といふ風に詠まれて居るのが一つ。もう一つは卷の十四

の中に、

子もち山若かへるでのみみづまで寝もとわが思ふも汝なは何あどか思もふ

といふ歌があります。「かへるでのみみづ」と假名書になつて居りますが、若い楓が赤くなるまでといふ言葉が使はれて居ります。萬葉集の中でたつた二つだけ、「かへるで」と「もみづ」と結びついて居るのであります、ただそれだけしか楓の紅葉は詠まれてゐないのであります。

それならばどういふ「もみぢ」が一番澤山詠まれて居るかと思はれますと、萩の「もみぢ」であります。これは九つばかり詠まれて居るのであります。その中に一つだけ「赤」といふ字が書かれて居るのであります、多くは「黄」といふ字で、例へば、

さ夜ふけて時雨なふりそ秋萩の本葉の黄葉ちらまく惜しも

といふ歌であります、これは「黄葉」と書いてあるのであります、秋萩の葉の「もみぢ」が散つてしまふのが惜しいことであるぞといふ意味であります。つまり萩の「もみぢ」が九つも詠まれて居るのであります。尤も今の萩のみぢと申しましたのは「もみぢ」といふ言葉が全部使はれて居るわけではないのであります、その中には「萩の下葉は色づきにけり」といふ言葉で表はされて居るものもあるのであります、それは今申しました「黄葉を詠ず」といふ歌の部の中にはいつて居りますから、それを暫く萩のみぢとして數へたわけであります。それから「あさぢ」今日つばなと申します

「ちがや」のみぢが六首も詠まれて居るのであります。さういふ風に萩やあさぢが六つも九つも詠まれて居つて、楓のみぢは僅か二首しか詠まれてゐないのであります。今日萩の花は賞美致しますけれども、萩のみぢといふものは、それほど人が氣づかないやうであります。萬葉人は萩のみぢにこの様に心をひかれて居つたことは、非常に面白いこと、思ふのであります。しかもこの事實から當時の人の「もみぢ」といふのは、吾々が想像する眞赤なもみぢでないといふことがそれで分らうと思ふのであります。即ち當時の人のもみぢといふものは、眞赤な色でなくして、黄ばんだ赤味を帯びた色であつて、「色づきにけり」といふ言葉に相當する言葉であつたのであります。で今日女の方の着物の裏なんかにする「もみ裏」なぞといふ「もみ」といふ言葉と、「もみぢ」の「もみ」とは語原が違ふやうであります。併し吾々はふとこの二つの「もみ」を同じ言葉でないかと考へられる程に「もみぢ」といふ言葉に赤を聯想するのであります。かういふ風に萬葉の歌をよく見ますと、決して「もみぢ」は赤くなるといふことではないのであつて、後世になつて、さういふやうに變つて來たのであります。萬葉時代には梨が澤山詠まれて居るのであります。梨といふと、今日は二十世紀のおいしい梨を想像するのであります。萬葉人は梨のみぢをも賞美して居るのであります。

露霜のさむき夕の秋風にもみぢにけりも妻梨の木は

梨の木といふために、妻といふ言葉を置いたのであります。さういふ風に梨の木のみぢを詠んで居

るのであります。その他葛の葉を詠んだ歌があります。

鴈が音を聞きつるなべに高松の野の上の草ぞ色づきにける

高松は高圓と同じく奈良の春日山の南であります。これももみぢを詠ずといふ中にはいつて居るのであります。そのほか、草のもみぢを詠んだのがあり、もう一つは孝謙天皇の御製に澤蘭さわらんといふものが詠まれて居るのでありますが、その御製の題辭に「黄葉澤蘭もみぢせるまゝあつし」といふ言葉が使はれて居ります。

この里はつぎて霜や置く夏の野にわが見し草はもみぢたりけり

といふ言葉が使はれてあります。御製の方には「わが見し草は」と草の名は擧げて居られないのであります。題詞には右に述べましたやうに「もみぢせる澤蘭一株を抜取りて云々。」と使はれて居るのであります。澤蘭といふのは、今日「澤ひよどり」といふもののやうであり、それは「ふぢばかま」——

蘭草と書く——と澤ひよどりとは非常に似たものであります。ふぢばかまといふ草はあまりはでない花であります。が併し如何にも日本の上代の人が好きさうな花だと思ひますが、どうも日本の秋草といふものは、日本人の心といふものを示して、日本人が如何に自然の草花を愛したかといふことは、秋の七草などを見れば、實によく分るのであります。日本の草花と、西洋の草花とを比べて見ますと、日本の草花は非常に味ひがあります。われもかうといふ花も非常に趣きのある野趣のある可憐な、如何にも日本人のすぎさうな花だと思ひますが、あゝいふ草花の美を見出した上代人のゆかしさがし

みじみしのばれるのであります。

尙その他注意せられることは、卷の十にある歌でありますが、眞木の葉を詠んで居るのであります。時雨の雨間無くし零れば眞木の葉もあらそひかねて色づきにけり

といふのであります。これも「もみぢを詠ず」といふ中にあるのでありまして、これも上代人が「もみぢ」として扱つて居つたことがわかるのであります。この眞木は今日の所謂榎でなしに、今の檜と先づ見ていゝやうであります。時雨の雨が間なく降るので、眞木の葉も時雨に争ひかねて色づいたといふのであります。これは新古今集にも採られて居る歌であります。眞木の葉が色づくといふことは、私如何にも注意すべきものでなからうかと思ふのであります。この歌が新古今集に採られて居ることは、これは稍ものを誇張したやうに思はれるところが、新古今の撰者に喜ばれたのだと思ふのであります。萬葉人はさういふ觀念的な心でなく、時雨に降られて居る眞木の葉を眺めつつ、なんとなく眞木の葉が色づいて來たと、現實に感じたのでないかと思ふのであります。この萬葉人が如何に自然といふものに溶けこんだ生活をして居つたか、自然と一つになつて生活をして居つたかといふことは、これを以て明かにすることが出来るかと思ふのであります。萬葉人が如何に自然と一つになつてゐたか、それには色々勝れた作があります。

夕さればおぐらの山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝ねにけらしも

といふ 舒明天皇の御製を初めとして、まことに自然と人間とが一つになつた、日本でなければ見られない勝れた作の多いことは、申すまでもないことであります。さうして其處に日本の吾々の自然に對する精神があり、又吾々の生活に對する態度も示されて居るのでないか、さういふ點に就いて、今日「自然を征服する」といふやうな、自然と人間とが對立するやうな西洋風な見方と、吾々祖先の日本人の考へ方生き方といふものとの相違といふものを、大に吾々は今日に於ても反省していいのではないかと思ふのであります。而もさういふことが感じられます根本に於ては、今申しました「もみぢ」といふ一つの言葉を、さういふ風に詮索することによつて、さういふ精神が一層明かにせられるのではないか、無論「黄」といふ文字が赤といふやうな意味を含んで用ひられたと考へていゝことではあります、併しそののみならず、「もみぢ」といふ言葉自身が單に赤くなるといふことだけでなく、廣く用ひられて居つたのであります、それが後世になつて、楓ばかりが、もみぢの代表と考へられることは、言葉の内容も變化したものであると思ふのであります。こゝにはたゞ「もみぢ」といふ言葉一つ取つたやうであります、さういふやうに、吾々は、言葉の内容の變遷と、さうして上代人が如何に自然と親しんだかといふことが、色々考へ合はされると思ふのであります。これは一つの例として申上げたのであります。

もう一つさういふやうな例を申して見ますと、萬葉には、「きよい」といふ言葉が澤山使はれて居り

まして、八十八使はれて居ります。「さやけし」とか「さやか」といふ言葉が四十四使はれて居るのであります。そのきよいといふ言葉の用ひ方が、今日と少し違ふやうに思はれる點があるのであります。それは卷の七に

泊瀬川はつせながるる水脈みせの瀬を早み井堤いづて越す浪の音の清久きよく

といふ歌があります。清けく、これが従來「清けく」と讀まれて居つたのでありますが、これは語法の解釋から申ししても、どうも「さやけく」と讀むのはをかしい、「きよけく」と讀まなければいけないのであります。それは何故さう讀むべきものであるかと申しますと、もう一つそれに非常に似た歌があります、やはり卷の七に

大海の磯もとゆすり立つ波の寄らむと思へる濱の淨きよ奚久きく

といふ歌がありますが、「きよけく」これは従來「さやけく」と讀まれて居つたのであります。「清」も「淨」も、さやと讀んで居る字であります。今日の吾々の語感からすると、「さやけく」と讀んだ方がいいと思はれるのであります。しかしこれは今日ではもう間違ひのない事實として、諸學者によつて認められるやうになつたのであります。それは「奚」といふ字が「さやけく」といふ場合の「け」には用ひない文字なのであります。「さやけく」とか、「はるけく」とかいふ「け」は「氣」とか「食」とかいふ字を用ひるのが本當で、「はるけく」「さやけく」といふ言葉は「はるけ」「さやけ」此處まで

が語根なのであります。それに活用語尾がついて、「はるけく」「はるけし」「はるけき」「さやけく」「さやけし」「さやけき」となるのであります。

ところが「きよけく」の場合は「きよ」までが語根で「け」は活用語尾でそれに「く」といふ言葉がついて「きよくあることよ」といふ意味になるので、この場合の「け」には「奚」とか「家」とかいふ橋本進吉博士の所謂甲類の假名を用ひるのでありまして、今の場合はそれであり「浪之音之清久」と「け」に相當する文字は用ひられてゐませんが、右の類推によりまして「きよけく」と訓むべき事が明かであります。それで今日に於てはこれはもはや疑のないことで認められて居るのであります。併しさういふ事實を抜きにして考へますといふと、「きよけく」といふのは、なんだか變に思はれるのであります。これは吾々の言葉に對する今日の感覺なのであります。

所がこの「清い」といふ言葉についてさういふやうなことが、まだ他にも二つばかりあるのであります。それは卷の十にあります。

秋風の清き夕に天の川舟こぎわたる月人をとこ

といふ七夕の歌でありますが、「月人をとこ」といふのは、本當は月を指すのであります。この場合は七夕の彦星のことをさしたとして取扱つてゐるのであります。これは「きよき夕」と讀まれて居つたのであります。これを、「さやけき夕」と讀んだり、或は「さやけき宵」と讀んだりする説があ

るのであります。現在に於きましても、これを、「きよき夕ゆふに」と讀む方と、「さやけき宵よひに」と讀む方と、「さやけき夕ゆふ」と讀まれる方と三つになつて居るのであります。先づ今日では、この「きよき夕ゆふに」といふ讀み方が大體認められて居るのであります。しかもこれも今の人は、「さやけき夕」と讀んだ方がいひのでないかと感じはしないかと思ふのであります。これもやはり、「きよき夕ゆふ」にと讀んだ方がよいと思ふのであります。それに就ては井上通泰氏が、「さやけき夕ゆふ」といふのは、「さやけき夕ゆふ」「天の河」「月人をとこ」といふ風に「二句、三句、結句ともに名詞どめとなりて調よからねば」と言つて「きよき夕ゆふに」と讀まれたのであります。たゞそれだけならば、「さやけきよひに」と讀んでもいゝことになるのであります。それだけの論では「きよき夕ゆふに」と讀む論據とはなり得ないと思ふのであります。やはりこれは右に述べた歌などの用語の類推によりまして、かういふやうに讀んだ方がいひと思ふのであります。今の人の語感だけから考へると、「さやけき夕ゆふ」とか、「さやけき宵」と讀んだ方がいひのでないかと思ひますが、それは後世の人を本にした感覺であつて、上代の人にはやはりきよきと讀んだのでないか、さういふ風に思はれるのであります。もう一つは卷の六にあります歌で、これは今までの歌よりも、もう少しややこしくなりますが、市原王といふ人の歌であります。

一松まつ幾代かへぬる吹く風の聲こゑの清者きよ年深みかも

といふのであります。これは「きよき」と讀むか、「すめる」と讀むか、從來はこれは聲の「すめるは」と讀んで居つたのであります。それに對して井上通泰氏は、「聲の清きは」と讀んで居られるのであります。併しそれは何故「きよきは」と讀んだかといふ説明はして居られないのであります。それはあまり深く考へて、「きよきは」と讀まれたのでなしに、ただ字の通りに「きよきは」と讀んだ方がよいと言はれたものと私は思ふのであります。しかし從來は「すめる」と讀んで居つたのであります。これになりますと、吾々の考へから言ひますと、この歌はまことに心のすむやうな感じの歌であります。一つ松に風が吹いて居る、その風がまことにすみ通つて居る、その老松は幾代か經つて居るのであらう、その松に吹く風がまことにすみ通るのは、年が深く經つて居るためであらうか、といふのであります。さういふ風にして味はつて見ますと、「すめるは」と讀みたいやうに思ふのであります。所がこれはやはり私は、「きよきは」と讀んだ方がいゝやうに、近頃段々はつきりとさういふ感じをもつやうになつたのであります。何故かと申しますと、「すむ」といふ言葉が、實は萬葉集にあまり使はれてゐないのであります。ただ萬葉集に住江の浦のことを、「清江」と書いた所が卷一と卷三と二箇所あるのであります。「住江」と書いたり「墨江」と書いたり假名書になつたりしてあるのが多く、「清江」と書いた所は二箇所しかないのであります。もう一つ卷の十三に、「清隅之池」といふのがありますが、これは「清澄」といふ字から來たのでないかと思ひますが、さうすると、萬葉集の中で、「すむ」とい

ふ言葉が、三箇所に使はれて居ることになるのでありますが、歌の言葉として、風がすむとか、音がすむとか、川がすむとかいふのは、少しも使はれてゐないのであります。すむといふ言葉は歌に澤山使はれていと考へられるにかかはらず、萬葉集には、水がすむとか、風がすむとかいふ言葉は、一つも使はれてゐないのであります。併しすむといふ言葉があつたことは、右にあげた地名によつて分るのであります。すむと使はれて居るのは、續日本紀卷の三十の寶龜元年三月の所に、

淵も瀬も清くさやけし博多川千歳を待ちて澄める川かも

といふ歌がありまして、此處に一字一音の使ひ方があるのであります。この川の「すむ」といふ言葉が、初めて使はれて居るのであります。かういふ風に「すむ」といふ言葉は、萬葉以後の寶龜元年に見えて居るのであります。萬葉集には、一箇所も見えてゐないのであります。ところが平安朝の源氏物語を見ますと、「すむ」といふ言葉が夥しく使はれて居るのであります。例へば月の形容としてどういふ言葉が用ひられて居るかと申しますといふと、源氏物語桐壺の卷に「月は入方の空清うすみ云々」といふ言葉が見えて居ります。又帚木の卷に、「きよくすめる月に云々」といふ言葉があり、又「月のすむ雲るをかけて云々」又明石の卷に「月も入方になるまゝにすみまさりて」とあり、又同じ卷に「このこる隈なく澄める夜の月」といふやうな言葉があり、又あざかほ權の卷に、「月いよくすみて」といふ言葉が見えて居ります。かういふやうに源氏物語を見ましても、月だけに、「すめる」といふ言

葉が、そんなに澤山用ひられて居るのであります。ところが一方萬葉集には、「きよき月夜に」とか「月よみの光をきよみ」とかいふやうに用ひられて居るものは、十六もあるのであります。その他に「さやけき」とか「さやか」といふやうに用ひられて居るのが、全體で七つあるのであります。源氏物語には、澄むといふ言葉がそんなに澤山用ひられて居りまして、「清く」といふ言葉は獨立しては用ひられず、「清く澄みて」と用ひられて居るのであります。即ちこの源氏物語に用ひられて居ります「澄む」といふ使ひ方と、萬葉集に「清く」と使はれて居るのは、全く反對になつて居るのであります。これは非常に面白いことであると思ふのであります。即ち源氏物語に用ひられて居る使ひ方が、今日吾々の感じ方であると思ふのであります。さういふやうに奈良朝と平安朝の間に相違があるやうに思ふのであります。従つて、吹く風の聲が澄むといふやうな感じは、これは吾々が源氏物語にならされて居るに過ぎないのであります。のみならず聲が澄むといふやうに用ひられた文字は、萬葉のみならず、上代を通じてないのであります。日本書紀の所謂流布本を見ますと、「澄む」といふ言葉は五箇所用ひられて居ります。神代の上の卷の天地が分れて來た所に、「清陽」といふ言葉が使はれて居りますが、此處を「すみあきらか」と讀まして居るのであります。また 仁賢天皇の卷に「遠近清平」といふ言葉を使つて居りますが、その「清平」を「すみやはらぎて」と讀まして居ります。それから 繼體天皇の卷に「天下清泰」と使はれて居りまして、「清泰」を流布本に「すむ」と讀まして居

るのであります。それから 安閑天皇の卷に、「内外清通」と書いて「清通」を「すみ通り」と讀まして居ります。それから「清明心」と書いて、「すめる心」と讀まして居るのであります。しかしこれらを実して、「すむ」と讀むべきものであるかどうかといふことは、可なり疑問であると思ふのであります。現に神代の卷の「清陽」といふ言葉に對して、「いさぎよく明かなり」と、清の字を「いさぎよく」と讀まして居るのであります。これは日本書紀の出來た時の正しい讀み方を傳へたかどうかといふことは分りませんが、併し最も古いものに、「いさぎよく」と讀んで居るのであります。その他、「清明」といふ言葉を「すみあきらか」と讀むかどうか、疑問と思ふのであります。「清明心」は「きよきあかき心」と讀んだ方が寧ろよいのでないかと思ふのであります。清通は「きよく通り」と讀んだ方がよいと思ひますが、併しともかく流布本に「すむ」と讀まして居るのが日本書紀には五箇所あるのであります。が、「もの音」がすむと用ひられて居る所は一つもないのであります。物音のすむといふ言葉を使はれて居るのは、源氏物語でも、見る方のすむよりは、聞く音のすむといふ方が少く用ひられて居るのであります。

かういふ風に見來りますと、「吹く風」に「すめる」といふのは、後世の讀方でありまして、またかういふ場合に若し「すめる」といふ風に讀むものとすれば、「清有」と「有」の字を添へて書かれて居るのが普通なのであります。それが書かれてゐない所から見ましても、これは「聲の清き」と讀むべき

ものであると思ふのであります。最近佐々木信綱博士、武田祐吉博士の校訂せられた定本萬葉集にも、「すめる」と讀まれて居りますけれども、それは後世の語感の上に立つて、從來の讀方を採られて居ると見るべきでありまして、私は「聲のきよきは」と讀むべきものであると思ふのであります。

さういふ風に、かういふ言葉はただ吾々の感じを本としては間違ふのでありまして、やはり上代の人的心になつて味ふことによつて、始めてこの歌の感じが味ははれるのであると思ふのであります。これはただ一つの漢字の讀方であるのでありますが、「もみぢ」の方は讀方といふよりも、内容の問題であり、こちらの方は讀方の問題でありますが、その二つの言葉の味ひ方と、解釋のしかたと讀方と、其處に吾々と上代の人との感じが違つて居る。その違つて居る所を、本當に味ひ分けることによつて、吾々の上代人が、如何に自然を觀、自然に親しんだかといふことが、始めて明かにさせることが出来るのでないかといふ風に思ふのであります。言葉といふものが時代と共に變遷して行くといふことは當然なことであります。同じ清いといふ言葉にしましても、例へば「清ら」といふ言葉は、萬葉集には使はれてゐない言葉でありまして、源氏物語になりました、非常に澤山使はれて居るのであります。或は「清げ」女の人の髪の毛の美しいのを、清げといふやうに澤山使はれて居りますが、清くといふ同じ言葉でも、萬葉集には「清く」と言ひ源氏物語は「清ら」とか、「清げ」といふやうに變化して居るのであります。萬葉集が、まことに清淨な精神を生かして居るといふやうなことに就きましたは、よく私

は申すことで、而もその清い精神を示す「清い」といふ言葉が、どういふやうに用ひられて居るか、吾々とはやはり違つた用ひ方をして、かういふ風に用ひられて居るといふやうな、まことに面倒な詮索を申したやうでありますが、それによつて吾々は、本當に萬葉集に接し、萬葉人に接することが出来るのでないかと思ひましたので、一二私の考へましたことを申上げた次第であります。(終)

(昭和十七年十月十日記念講演)

